



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	むくどりホーム・ふれあいの会の生い立ちといま
Author(s)	柴川, 明子
Citation	子ども発達臨床研究, 10, 3-17
Issue Date	2017-03-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.10.3
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65053
Type	departmental bulletin paper
File Information	050_1882-1707_10.pdf



むくどりホーム・ふれあいの会の生い立ちといま

柴 川 明 子*

【目次】

はじめに

- I. 活動開始の要因となっていること
 - 1. 40 歳代まで
 - 2. 50 歳代から
- II. 藤野むくどり公園とむくどりホーム・ふれあいの会の関連
- III. どのようにして実現できたか
 - 1. 学びによる基礎づくり
 - 2. 協力してくださった方々がいたこと
- IV. 公園に関すること
 - 1. 一般的な公園について
 - 2. 藤野むくどり公園について
- V. むくどりホーム・ふれあいの会の現状
 - 1. 参加者の感想から
 - 2. 様々な課題への対応とスタッフの役割
 - 3. 研究対象として、ボランティア研修の場として
 - 4. こうありたいと願うこと

おわりに

- 1. 発足 20 周年を迎えて思うこと
- 2. 大きな挫折
- 3. 新たな出発

キーワード：バリアフリー、ふれあいの拠点、公園、違いを認め合う、共に創る

はじめに

私は 81 歳の自称むくどりおばあちゃんです。3 人の子どもと 4 人の孫がおりますが、現在は 85 歳の夫と札幌市南区藤野に二人暮らしをしております。発足 20 周年を迎えたむくどりホーム・ふれあいの会についての検証をこの時点で行い、今後の活動の土台にしたいと思います。

*むくどりホーム・ふれあいの会 会長

I. 活動開始の要因になっていること

はじめに自己紹介を兼ねて、どうしてむくどりホーム・ふれあいの会の活動を始めようとしたのか、ここに至るまでの経緯を説明したいと思います。

1. 40 歳代まで

1935 年私は静岡県富士宮市に生まれましたが、私が生まれる 1 年前に、この町は大火事に見舞われ、町のほとんどが焼失したそうです。その時の火事の出火元が、目の見えないおばあさんの家であったと言いふられ、のちにそれが濡れ衣であったということが判明したとのことを、私は小学校低学年の時、母から聞きました。そして、そのおばあさんがどんなに辛い思いをしたことかと、私は心を痛めました。このことが、障がいのある人について意識した初めでした。

中学生の時、『少女の友』という雑誌で、アメリカのボストン市のパーキンス盲学校教員養成課程のことを知り、なぜか私もいつかここに行きたいと思いました。そこはヘレン・ケラーの家庭教師であるアン・サリバン先生が学んだ学校で、卒業後あのような立派な働きをなさったことに感銘を受けていました。パーキンス盲学校へは、今までに 3 度訪問していますが、1 か月か 2 か月滞在して、生徒さんと一緒に授業に参加させていただいて、同じ時間を共有したいというのが今までの夢です。

高校生の時、私は教会で菅野貞子さんに出会い、お友だちになりました。彼女が行きたいという静岡盲学校の寄宿舎に、電車や汽車を乗り継いで一緒に出かけ、寄宿舎の女子生徒と会いました。そこで、菅野さんが言った言葉は、「私達は目が見えないことで、毎日不自由な生活をしています。でも見えない自分を好きになりましょうね」でした。この彼女の言葉にとっても感動したことを今も忘れられません。彼女の障がいに対する真摯な向き合い方、力強さを感じます。彼女は歌がお上手で、明るい方で、私は一緒にいていつもとてもうれしく思っていました。

やがて彼女は結核を発病し、東京の結核療養所に入所し、私に点字の手紙を送ってくださいました。彼女の手紙はまず、山形の療養所に入所しておられた小関豊太さんに送られ、小関さんが点字の下に仮名をふってください、それから私の元に郵送されてきたのでした。

何回かこのような手紙を受け取ったのち、私が点字を覚えたらもっとよいと思い、小関さんに手紙で点字の読み方を教えていただきました。

私はその後東京の東洋英和女学院短期大学保育科に入学しましたので、菅野さんとは東京で再会しました。その時、彼女に頼まれたことは、「東京には目の不自由な大学生が大勢いるので、その人達に本を読んで上げるリーディングサービスをしてほしい」ということでした。私はクラスメイトを誘ってその活動を始めました。この活動が下級生にも受け継がれていったことを後に知って、私はとてもうれしく思いました。

私は短大生の時、ヘレン・ケラー最後の来日の講演会を東京で聞くことができました。このときの通訳者は当時私たちが保育科で児童文学と言語指導という授業を受けていた村岡花子先生でした。その他に NHK ラジオで、リーディングサービスのことが取り上げられることになって、取材に対応したこともありました。

尚、短大保育科時代は 40 名中半数以上が地方出身で、寄宿舎生活をしました。2 年生のある日、寄宿舎のお風呂に入っている時、クラスメイトから東京教育大学特設教員養成部の事を聞き、早速翌日には問い合わせに行きました。

同級生が皆卒業と同時に幼稚園に就職していく中で、私は東京都雑司ヶ谷の東京教育大学特設教員養

成部普通科盲教育専攻一年間のコースに進学しました。そこで、佐藤泰正先生、佐藤親男先生、大山信郎先生、草島時介先生などの授業を受け、実習は付属盲学校で行いました。その時の小学部一年生の担任は河合先生であり、たしか生徒は8人だったように思います。河合先生は、とても活発な授業展開をなさり、ある雨の日は校庭の水たまりに生徒を連れて行って、思う存分どしゃぶりの雨の中で遊ばせておられました。このクラスに、のちにシンガーソングライター及びギタリストとして活躍なさる長谷川きよしさんがおられました。色白で小柄でおとなしく可愛らしい生徒であったという印象が残っております。

その一学年下の幼稚部には男女1名ずつの在籍でした。一人がお休みすると、一人だけのクラスになってしまい、音楽の時間には幼稚部の生徒が小学部1年生のクラスに合流させてもらっていることもありました。当時、盲学校の幼稚部は東京と京都に1校ずつしかありませんでした。

付属盲学校で実習したとき、幼稚部の親子と親しくなり、ある日こんな質問をしました。「盲学校以外で子どもと遊ぶことができますか」。すると、そのお母さんの答えは、「そのような場所も、チャンスも、時間もありません」ということでした。私は、ぜひ障がいのある子もない子と一緒に遊べる場を作りたいと、20歳の時こう思いました。その夢は40年後にむくどりホーム・ふれあいの会という形で実現しました。むくどりホーム・ふれあいの会の発足は付属盲学校幼稚部の親の話が原点です。

私は40歳代までに勉学、就職、結婚、子育て、夫の会社の倒産による再就職、専業主婦、PTA活動、地域活動等を経験しました。

2. 50歳代から

50歳になった時、何故か私は、自分がどうしてもやりたいことをするための準備勉強のタイムリミットに来たと感じました。そして、札幌市内の北星学園大学社会福祉学科3年生に編入学し、障害者福祉を学び、その後道外の筑波大学大学院教育研究科で障害児教育を学びました。また、玉川大学の通信教育では教育学を学びました。これらの学びを通じて、ノーマライゼーション、障害理解教育、全人教育などを知りました。

大学院からもどった翌年1992年に4つのことを始めました。

(1) 女性学級開級

修士論文作成の時、札幌盲学校訪問や視覚障がい者の子育てのビデオ（NHK特集『のぞみ5歳——手探りの子育て日記』）の視聴とアンケート調査に協力してくださった方々の中の藤野近辺にお住まいの方々に呼びかけて、「視覚障がい児・者への理解と支援」というテーマでひかり女性学級（札幌市社会教育課の推奨による活動）を開級しました。この学級では視覚障がい者との交流会や、視覚障がい者の講演を聞く学習会、読書会、布の絵本づくり、盲学校や盲老人ホームへの訪問、年度毎の文集づくりなどを内容としたもので、30名位の学級生と共に、4年間月一回の楽しい活動をしました。この時のお仲間6名が発起人となって、1995年にむくどりホーム・ふれあいの会を発足しました。

(2) 視覚障害児親子相談ルーム開所

視覚障がい児親子相談ルーム・ハプティックを豊平区で開き、個別に子どもと遊ぶ他にお母さんたちの話を聞いたり、親だけの会を開催したりしました。私はお母さんたちの話のごみ箱になりたいと願い、親の話をよく聞きました。ここのメンバーだった方々の数名が後にバリアフリー公園として新しく造成することになる藤野むくどり公園設計の相談会に参加し、むくどりホーム・ふれあいの会発足後は遠方からよく活動に参加していました。

(3) 非常勤講師となる

札幌医学技術福祉専門学校の非常勤講師になりました。「保育理論」「障害者福祉論」を担当し、若い学生さんと共に10年間学び合いました。授業の他に、希望者と共に、ハプティックで若い視覚障がい女性たちとの交流会や、むくどり公園・むくどりホーム見学、レーナ・マリアさんの演奏会参加等も行いました。

(4) カナダ視察旅行

当時カナダの子育て家族支援の研究をしておられた市立名寄短期大学の小出まみ先生のお誘いで、カナダのオンタリオ州トロント市からバスで2時間の、人口6万人のピーターボロ市に研修旅行に行きました。小出まみ先生との出会いは、1991年に神戸女子大学で開かれた日本保育学会の同じ教室での発表でした。

カナダ旅行の時に、カナダの子育て家族支援センターであるドロップインセンター(ちょっと立ち寄って交流する所)を見て、具体的にこのような場を創りたいと思いました。たまたま見学したところがごく普通の二階建ての一軒屋でした。親子が自由に集い、お互いにゆったりとした中で交流する姿がとても良い雰囲気を醸し出していました。私は見学したとき、「これだ！このような形で活動を開始していきたい！」と強く思いました。私は乳幼児親子だけが対象ではなく、赤ちゃんからお年寄りまで障がいのあるなしに関係なく、誰もが自由に集える場所をつくりたいと願いました。

それまでに、障がいのある子どものお母さんたちから、公園などで疎外される辛い体験をしてきていることを聞いていましたから、一緒に集まってお互いに交流し、友達にならなくてはならないと思いました。

II. 藤野むくどり公園とむくどりホーム・ふれあいの会の関連

ちょっとややこしいのですが、説明させていただきます。我が家の真向かいには夫の土地がありましたので、私はそこに建物を建てて、周りを遊び場にして、障がいのある人もない人も一緒に遊べる場にしたらいいかなと思っていました。夫は私の夢を実現させようと、あの当時、展示しているモデルハウスを抽選で売却しますというのが、さかんに行われていて、その抽選会によく出かけていってくれましたが、全然当たることはありませんでした。

どうしたらよいかと思案していましたら、1994年暮れに、近くにあった、藤野むくどり公園が、オカバルシ川の河川用地となるために、取り壊されることになり、札幌市はその代替えの土地を探していました。そして、我が家の向かいの土地が候補にあがり、土地の所有者である夫の会社に交渉にいらっしゃいました。その時、夫は「妻に相談します。妻はあの土地に障がいのある子とない子が一緒に遊ぶ場をつくりたいと、夢のようなことを言っております」と言ったそうです。すると、「どんなことがしたいのですか。奥さんに会わせてください」ということになり、その結果、障がい児・者や町内会の方々と相談会を開いて、バリアフリー公園の設計図をつくることになりました。1995年4月から8月まで、総勢56人の月一回の相談会が藤野第一町内会館で開かれ、8月に設計模型が完成しました。しかし、着工は翌年になることになり公園開園は1年後ということになりました。

公園は人と人が出会う素敵な場所ですが、交流の継続のためには、どうしてもふれあいの拠点が必要であると私は思っていたので、設計の相談会が始まった時、最も立地条件が良い、我が家をふれあいの拠点として開放することにし、そのための改修工事をしました。そこで、8月に相談会が終わった次の月の9月9日にむくどりホーム・ふれあいの会を発足し、翌年8月までは月一回の会を、「公園の

開園を待ちましょう」という会として、毎月行いました。1996年8月8日にむくどり公園が開園してからは、週2回の活動となり、2008年度からは週3回10時から午後4時までの活動となりました。

公園計画課の職員でむくどり公園設置にご尽力下さった方が、「むくどり公園の本当の良さ、素晴らしさは、むくどりホームとの一体的関係にあってこそ成り立って来たのです。」(むくどりホーム・ふれあいの会20周年記念コメント集P.111)と、活動開始の20年後にコメントしてくださいました。同様にむくどりホーム側にとっても、むくどり公園があってこそ、むくどりホーム・ふれあいの会がより良い活動を進めることができています。双方にとって、切っても切れないつながりがあります。

名称はむくどりホームにするか、むくどりハウスにするか、むくどりふれあいの家にするか迷いましたが、ホームという言葉があったかくて良いとの意見を取り入れて、むくどりホームとしました。むくどりは藤野むくどり公園からいただいた鳥の名前です。

Ⅲ. どのようにして実現できたか

1. 学びによる基礎づくり

若い頃の学びと50歳以後の学びを振り返ってみますと、余裕のある優秀な学生ではなく、常に自分の力不足により、追われ追われた学びであったように思います。得た知識は乏しく、何ら誇りうるものはないのですが、学生としての楽しい思い出が多くありました。

特設教員養成部では8名のクラスメイトだったので、“八つ目うなぎ”と銘打って、後々までつながりを持ちました。このときの教官・佐藤泰正先生には30数年後の大学院での教官としても指導していただきました。

通信教育でのスクーリングでは、雨の中の学園祭を謳歌し、課外活動の合唱指導では、歌うことの楽しさを満喫しました。また、玉川学園の創立者・小原国芳先生の熱のこもった全人教育の講義を、暑さ厳しい中で真剣に聞きました。

卒業論文作成時に面接調査をさせていただいた10名の視覚障がい女性とは、ずっと交流を続け、ひかり女性学級の基礎を築いていただきました。

大学院でのレポート提出には、26名のクラスメイトが教室で完徹(完全徹夜)してレポートを完成させ、朝帰宅したりしたこともありました。

活動開始後に作成した通信教育の卒業論文では、僅かばかりむくどりホーム・ふれあいの会の活動の検証をしました。

卒業論文も修士論文も未熟なものでありましたが、その後の活動の基礎固めとしての効果を発揮するものであったと思います。従って学びは活動にとって、なくてはならない基盤となっていることを後に実感しています。

2. 協力して下さった方々がいたこと

(1) 設立前

まず、ひかり女性学級生や視覚障がい児親子相談ルーム・ハブティックの方々がむくどりホーム・ふれあいの会の発足に向けての最重要メンバーでした。私の思いを語り、皆さまのご意見を聞きました。

次に、行政の方々が思いを受け止めてくださって、バリアフリー公園の設計つくりの参加者の相談会(ワークショップ)を計画し、実践して下さったことは本当にありがたいことであったと思います。

活動場所の提供としては、夫の協力で自宅改造をしてもらいました。

(2) 設立後

遊具の設置や15年位行われたむくどり公園開園記念会などで、沢山のご協力がありました。町内会を初め、行政、市民団体、民間企業、社会福祉協議会、一般市民の方々など多くの方々に支えられてきました。

むくどり公園が開園してから2か月後に、近くの手作りパン屋さんからの申し出で活動日の前日の夜、閉店後に残ったパンを提供してくださいました。3年間という長きにわたって、参加者はそのパンをいただくことができたのでした。

家庭菜園の野菜を提供してくださる方、公園の草取りをしていると缶コーヒーを提供してくださる方、そのほかにも心温まるご支援に支えられてきました。

私は活動開始から11年目に疲れと行き詰まりを感じ、1年間の休暇をいただきました。1年間の活動閉鎖を覚悟していましたが、副会長の前田典子さんが「活動の灯は小さくても灯し続けた方がよい」と言って、会長休暇の一年間の全責任を負って下さり、「むくどらー」というボランティアスタッフが見事にチームを組んで、活動を続けてくださったのです。そのおかげで私はリフレッシュし、その後の活動を続けて2015年に発足20周年を迎えることができました。

IV. 公園に関すること

1. 一般的な公園について

(1) **ハード面** 公園の設備や遊具については検討されれば、よりよいものが設置される可能性があります。

(2) **ソフト面** 設備がよりよいものに整備されただけでは障がい児が遊びに行くのに十分とはいえません。ソフト面での配慮が不可欠です。

視覚障がい児親子相談ルーム・ハプティックに参加していた障がい児の親は各々が公園での辛い体験を持っていました。以下は直接私が聞き取った親の話です。

- ① どうしてこんなに障がいの重い子どもを公園につれてくるのかと言われた。
- ② バギーにのせたわが子を、楽しそうに遊んでいる子どもたちの近くにつれていくと、パッと逃げられた。お友達になったら、友達のいやがることはしないはずであるのに。
- ③ こんなに障がいが重くて、生きていて何が楽しいのだろうかと言われた。
- ④ 出産後の医師の宣告は「将来盲学校へ行くことになるでしょう」だった。心痛は大きかったが、次のように決意した。「それなら、盲学校へ通いやすくて、近所の子どもと一杯遊べる公園の前の家に引っ越ししよう」と。子どもは体も弱く、入退院を繰り返していたが、元気になっていよいよ公園へ遊びに行った。ところが、遊びに来ていた子どもたちから、「あの子の目変だ」「滑り台に上るのが遅い」などと言われ、拳句の果てには、つばをはきかけられた。そこで、風が強くて他の子どもが遊びにきていない日を選んで自分の家の目の前の公園に遊びに行った。

上のような話を聞いた2年後に、「障害をもつ子の放課後」実態調査団調査報告書『この声が聞こえますか 障害をもつ子の親達 814人の叫びとささやき』（松本伊智朗・佐藤満・二通諭編著 1996年6月20日「障害をもつ子の放課後」実態調査団）が発行されました。このアンケート調査を20年前に読み、今再び2002年新装版を読み返してみても、ますますバリアフリー公園とふれあいの拠点の必要性を感じました。この814人の叫びとささやきを受け止め、このような悲しい思いをする人がたった一人でも減って

ほしいと願います。

以下に『障がいのある子の放課後実態調査団報告書 松本伊智朗・佐藤満・二通諭編著この声が聞こえますか 2002年2月1日新装版発行 “いきいき” 障がいのある子の放課後を考える会』の第2章親たちは叫ぶ——自由記述のまとめを抜粋させていただきます。

「簡単に言うということなのです。

友だちがいない

地域に“場”がない

だから、ひとりであり、

母が相手であり、

家族だけである。

中略

だから、関わりを求めて

母が悩み、負担をかかえながらも

必死にがんばっているのです。

さらに続けると、

人は大人でも子どもでも、人とかかわって生きていく

その一番大切な相手や場がない。

中略

障がいのある子とその家族が、みんなと同じように地域の中で人と関わり、支え合いながらいきていけるように、ここにある親たちの生の声、切なる要望を早急に実現しなければならないのです。」(p.65、66)

また、以下のような記述もありました。

- ① 近くの公園へ連れて行くが、やはり私の方が人目を気にしてしまうので、あまり行きたくないというのが正直な気持ちです。(p.141)
- ② 特にどこかへ通わせるというより、家の近くの公園などで一緒に遊んでもらえるような子がいるなら、その方が良いと思う。(p.161)

今、私は再び衝撃を受けました。どうしたら実現できるのでしょうか。むくどりホーム・ふれあいの会の最重要課題として、たとえどんなに小さくても、その実現を目指して歩みを進めていきたいと切望します。むくどり公園とむくどりホームを用いて。

2. 藤野むくどり公園について

(1) ハード面

障がい児が使える遊具の設置についてワークショップにおいて皆で考え合いました。

テニスコート2面分の小さ目の街区公園です。背もたれのあるシートベルト付き椅子型ブランコ、介助者も一緒に乗れる幅広ブランコ、ゴムチップの園路、公園を一周する手すり、噴水、点字案内板、寝たままで使える幅広のころころ滑り台、大型滑り台、芝生、花壇、藤棚、もみの木、さくらの木、ナナカマド、ラベンダー、車いすに座ったまま使える砂場などが設置されました。



写真1 藤野むくどり公園とむくどりホーム（写真右の自転車が停まっているところがむくどりホーム）

障がい児にも配慮されていますが、障がいのない子どもにとっても、とても楽しく遊べる公園です。

(2) ソフト面

公園は人と人がふれあう素敵な公共の場所です。誰も独占することはできず、他の人を疎外したり、排除することはできません。公園こそが初対面の人と出会う交流できる絶好の場であると思います。障がいや老いや弱さの故に軽んじられてはなりません。時として、心ない言葉に傷つく人があるのです。どうか、下記の障がい児の母親の感想がむくどり公園で実現してほしいと切に願います。

- ① 「「障がいのある子もない子も、共に遊べるみんなの公園」ということなので、その意味ある言葉に、おおらかな気持ちで安心して行くことができます。子どもにも私にも、たくさんの出会いを期待しています」（藤野むくどり公園開園5周年記念誌 P.158）
（公園設計の相談会から参加していたお母さんの感想。この親子はかつて自分の家の前の公園で辛い経験をしました。）

- ② 「すばらしい公園ですね。実はずっと心配していたことがあったのです。それは、障がい者専用に重点を置くと、どうしても過保護になりやすくなるので、健常者にはおもしろくないのではないかと。使うのは健常者の方が多いのだから……。しかし、公園開園式のあとの子どもたちを見て安心しました。健常者はそれなりに遊び方を発見し、楽しむことを知っているのもものね。障害者用は障害者しか使えないのではなく、いっしょに使うことができるのだと、改めて思いました」（筆者のファックスに届けられた手紙）
（公園設計づくりの相談会に参加していたお母さんの感想。むくどり公園開園式の日、重度重複障害の娘さんをシートベルト付きの背もたれブランコに乗せた時、「一人でブランコに乗れた！」と大声で歓声をあげたお母さんです。）

以下にむくどり公園内での子どもたちの遊びの三場面を記載します。このような交流の積み重ねがと

ても大切であると思います。

- ① この地域の小学校2年生のしょう君と、遠くから来ていた養護学校（特別支援学校）3年生のしょう君がむくどりホームで出会いました。お互いの名前を教え合った時、同じしょう君であり、しかも漢字も同じであることが分かって、一層親しくなり、小学校2年生のしょう君が提案しました。「しょう同士でむくどり公園に散歩にいこうよ」と。3年生のしょう君を乗せた車いすを2年生のしょう君が押して、公園の遠路をぐるぐる散歩しました。そのあとは、ローラー滑り台に座布団を3枚敷いて、3年生のしょう君をその上に寝かせ、2年生のしょう君が座布団ごと引っ張って滑り台の登り降りをしました。それを喜ぶ3年生のしょう君の笑顔を見ながら、2年生のしょう君は汗をかきかき何度も座布団を引っ張りました。
- ② ブランコに乗った養護学校（特別支援学校）の生徒を、周りにいた地域の小学生に紹介しました。握手して名前を呼び、自分の名前を言うように促したところ、皆恥ずかしそうにしていました。でも勇気を出してそのようにした後は、次々に車いすを押して公園を回りました。また、盲学校小学部の生徒は地域の同じ学年の小学生とままごと遊びをしました。
- ③ 異なる小学校・中学校の生徒たちの初対面の日の出来事は、とても面白い成り行きになりました。4人ずつの女児の2グループが、互いに規則を持ち出して喧嘩を始めました。この公園はお菓子を食べてはいけないとか、ブランコに立ち乗りしてはいけないとか、マットの上に飛び降りてはいけない等と言い争っていました。そこで、以前から来ている子ども達が、私に応援を求めてきました。私は皆が言うことを十分聞いて、考え合ったあと、「あの子とか黄色いリボンの子などと言い合っているのは、名前を知らないからでしょう。お互いに自己紹介をして名前を覚えてほしいんじゃないの？」と言いましたら、お互いに自己紹介を始めました。そして、「ニックネームは何？」「野菜のニックネームをつけようよ」などと言っているうちに双方すっかり仲良くなってしまい、そのあとのよく遊ぶこと、遊ぶこと。おにごっこ、じゃんけん遊び、手つなぎ鬼、竹馬、滑り台鬼ごっこなど次々に遊びを展開していきます。帰りには、「またあした遊ぼうね」と約束し、翌日も実によく遊んでいました。そのまた翌日は、むくどりホームのオープン日でしたから、むくどりホームの中でもよく遊び、ミュージックベルも一緒に楽しみました。

V. むくどりホーム・ふれあいの会の現状

1. 参加者の感想から

むくどりホーム・ふれあいの会の参加者の皆さんからいろいろな感想を聞きます。

「実家のように」「大家族のように」「ごった煮のように」と感じて下さる方が大勢いらっしゃいます。そして、大人である自分自身にとって「まるごと受け入れられて、安心できる場」だったり、「その人自身を価値あるものとして、受け入れる一貫した姿勢が自己不信でへとへとになっていた私を癒してくれました」という場所にもなっていました。また、現在置かれている社会情勢から見て、「虐待、差別など悲しいニュースが絶えない現在だからこそむくどりホームのような垣根のない心温まる場所が必要なのだと強く感じました」という感想を持つ方も多くいます。

かつて、むくどりホームだよりに投稿していただいたお母さんの感想を、少し長くなりますが、ぜひここに載せさせていただきたいと思います。

“ありがとう。みんないてくれてよかった。” (IY さん)

「私たち親子は、むくどりホームができた時からみなさんのお世話になっています。家が遠いので月に1、2度しか子どもを連れて来ることができないのですが、来るたびに新しいお友達に出会ったり、お母さん達やホームに関わっている方々と情報交換をしたりすることが、ひとつの楽しみです。今ではすっかり、重い障害のある我が子を同伴できる大切な社交の場となっています。

でも最初からそうであったわけではないのです。生まれつき脳性マヒという障害を持った我が子は、成長とともに同年代の子ども達との能力の差がみるみるついてきました。みんな走り回ったり、おしゃべりしているのに、うちの子は赤ちゃんのまま取り残されていきました。

とはいうものの、小さい頃から障害児の通う施設で育ってきたので他人と比較して落ち込んだりすることもなく、自分では割と前向きにやってきたつもりでした。どんどん外に連れ出して、いっぱい刺激を与えてやりたいと常に思っていました。元気な子ども達が大勢出入りするむくどりホームはまさにうってつけの場所のように思えたのです。

ところが実際に来てみると、何となく居心地が悪いのです。よちよち歩きの子から小学校高学年ぐらいの子までが、ドタバタ走り回り、大さわぎして遊んでいます。我が子は騒々しさにおびえて、ただ泣くばかり。まわりを見回すと、我が子よりずっと年令の低い子ども達がたくさんおもちゃをあやつり遊んでいます。こんなこと、うちの子はしたことがない……。初めて健常児との接点を持つ機会を与えられたむくどりホームで、あらためて障害児とそうでない子どもの差を思い知らされました。

むくどりホームに来ると辛い思いをする。でも来るのをやめませんでした。その理由は、ホームの方々がいつもあたたかく遊んでくれたからです。涙と鼻水とヨダレでぐちょぐちょになっている子どもをひぎに上げ、衣服が汚れるのをいわず遊んでくれました。

そうこうしているうちに子ども達の元気さにも慣れ、我が子も同年代の子どもとほんの少しかわりを持てるようになりました。クリスマスのミニコンサートの時などは、小さい子供が泣いている我が子に楽器を手渡そうとしてくれました。“そうか。みんな我が子の味方だったんだ。大きくなったら障害を持った人の手助けになる人達なんだ。”という思いが、その時ふと頭をよぎったのです。すると急にいとおしくなり、感謝の気持ちかわいて来ました。“ありがとう。みんないてくれたよかった”と。」

(むくどりホームだより No.25 1998年9月26日発行)

これこそ私が目標としてきたむくどりホームの存在意義であり、よくぞ、ここに思いを到達して下さったかと、とてもうれしく思います。

この感想に小出まみ先生も大変感動され、ご自分の講演の最後に、“どうしてもこの文章に行きつきたいと思って話しているのよ”とおっしゃっていたことが思い出されます。

どうか、障がいのある子どものご家族も、ちょっとだけであきらめずに、つながりを持続けましょう。

2. 様々な課題への対応とスタッフの役割

小学生の暴言、幼児のけんか、盗難事件、誹謗・中傷、その他たくさんの課題が持ち上がります。それらへの対応その他にスタッフは重要な役割を果たしています。

参加者の受け入れ、出迎え、見送り、寄り添い、話し合いのリード、参加者一人一人に対する配慮、活動後の振り返り、課題の共有など様々な役割があります。中でも私がいつも感心するのは、自己紹介や一言コメントの時、発言している人に適したコメントをつけていることです。発言した人は、言ってよかったと思えることがよいと思います。

3. 研究対象として、ボランティア研修の場として

大学生の卒業論文や大学院生の修士論文の作成、中学生や高校生の子育て体験交流会、小学生の総合学習、通園施設の親子の体験の場、中学生茶道部によるお茶会(ホーム内での初釜と公園での野点)、大学生のボランティア研修の場としても、活用されています。

ある大学生は「年齢の異なる人たちと出会えるということは、だれにとっても人間らしく豊かなくらしだと思う」とコメントしてくださいました。

4. こうありたいと願うこと

K君のお母さんが以下の感想を寄せてくださいました。

「自分の得意なことを、皆と共有できたら、うれしいよね。先日K君は子供たちとお相撲ができて最高にhappyでした。身体ごとぶつかり合って、活気があって、ワイワイにぎやかな楽しい時間を過ごしました。

白杖について質問されたり、答えたりということもありました。こういうこと一つ一つが積み重なって、だんだん互いに近づいていき、分かり合えるのだらうなァと思いました。親ではなく、他の方たちが子供たちの間に入ってくださったのが、より良かったのだと思います。こういうふうに自然で素直に関係を持てるのが、むくどりホームの素晴らしさだと、つくづく思いました。

自然に話せたり、遊べるには、何度も何度もたくさん会う時間を持つことでしょうね」
(むくどりホームだより No.17 1997年1月1日発行)

この日のことは、とても印象深いものでした。白杖をついたK君とお母さんがむくどりホームの玄関に入ってきました。その時、玄関にちょうど近所の小学校1年生のM子ちゃんと私がいました。M子ちゃんはK君との初めての出会いの日でした。M子ちゃんはすかさず聞きました。「目、どうしたの？ どうやって歩くの？ どうやってご飯たべるの？」そこで私は答えました。緑内障という目の病気のこと、白杖を使って歩くこと、ご飯はみんなと同じように食べること。そして「みんなでのお相撲とって遊んだらどう？ K君は本物のお相撲さんにさわったこともあるんだよ」と私が提案したら、室内にいた小学生男児3名と一緒に相撲をとって遊びました。とてもうれしい感動的な情景でした。

このように、自然な形で人と人とが良い関係をもっていくことが大切であると思います。

そして「冬でも遊べるバリアフリー公園と、その横のふれあいの拠点では、現在起きている様々な課題を少しでも予防する活動ができると確信する」と、20年間同じことを言っているような気がします。

しかし、このことはゴールに近づいたというのではなく、まだまだ未完成であり、道半ばであり、これからたくさんの課題をクリアしていかななくてはならない活動です。誰もが皆差別されず、虐げられず、大切にされ、尊厳を保ちつつ、その人らしい人生を歩むことができればこの上ない喜びです。

私たちがやっていることは、札幌市の片隅の小さな公園と民家を改造した場所で展開している見栄えのしないちっぽけな活動です。でも、頭で考えるだけでなく、お互いに知らなかった者同士が同じ場所

に集い、お互いに違いを認め合いつつ、お互いに一緒にいてうれしいねと思い合って、仲間になっていく、この体験の積み重ねによってはじめて心のバリアフリーの輪が少しずつ広がっていくのだと思います。

おわりに

1. 発足 20 周年を迎えて思うこと

20 年の活動を経過した今の実感は、やっぱりこの活動を創り上げてよかった、活動を続けてきてよかったということです。小学生の時、遊びに来ていた子どもたちが、結婚し子どもが生まれ、父親、母親になって子どもを連れてむくどりホームに遊びにきてくれた時など本当に嬉しく思います。

現在の参加者のおひとりのコメントにも、「この活動がいつまでも続き、大きくなった息子と訪れるのが私の夢です。むくどりっ子の一員になれてうれしく思っています」（むくどりホーム・ふれあいの会 20 周年記念コメント集 P.35）という言葉がありました。このような期待に添えられる活動の継続ができたらどんなに素敵でしょう。

また、近くの一般小学校 6 年生の時、学校でいじめにあってむくどりホームに逃げ込んで来た男児がその後、支援学級に入り、中学・高校を経て一般企業に就職したのですが、そこを 2 年で退職し、園芸療法の作業所に通うようになり、むくどりホームに今もつながっている青年がいます。中学でのいじめが一番ひどかったとのこと。先日「海底の君へ」というテレビを見て、いじめの深刻さに心が痛みました。参加者の過去のいじめ体験に耳を傾け、いじめ防止や対策を話し合う必要を感じます。

2. 大きな挫折

20 周年記念会が終わった後に、立て続けに 2 つの盗難事件が起きました。そして今回は 20 年間 1 日も活動日を閉じるということをしたことがなかったむくどりホーム・ふれあいの会を、まず 4 回閉じ、更にしばらくの間閉じますという告知をせざるを得なかった事態に陥り、私は断腸の思いでした。できるだけ早い再開を願いつつも、ここで大きな課題を突き付けられたのでした。そして、約 1 か月間、合計 13 回の活動の休止をさせていただきました。

この間に、警察の捜査への協力、以前からの懸案であった誹謗中傷に対する対処、被害者との意思疎通、その他、行政からの助言も受け、ソフト面ハード面での安全対策と心構えと参加者への対応の仕方の一致など、これだけの期間が必要でした。

誰でもどうぞと、あらゆる人を受け入れてきました。多世代交流の良さも体験してきました。「むくどりホームに来るようになって、心が癒され、『他の人に対する対応が穏やかになったと家族に言われた』』という壮年の方の話も聞いています。

しかし、今回のような事件が起きますと、どう対応してよいのかと戸惑います。たくさんの意見が交錯します。皆、むくどりホームのことを思っている発言です。何度も話し合いを重ねながら、よりよいむくどりホーム・ふれあいの会の活動を継続していきたいと願います。

そして、今回むくどりホーム・ふれあいの会一同として以下の告知がされました。

「だれでも来られるところではありますが、《安心を守るため、それを犯す言動を故意に行う方には参加をご遠慮いただくこともあります》というルールを設けて実行することにしました」

3. 新たな出発

むくどりホーム・ふれあいの会の発足からのことを思い起こしますと、さまざまなことがありました。

むくどり公園、ひよどり公園の公園管理は、以前は第一町内会が受けていましたが、当時の町内会長さんのご配慮により、むくどりホーム・ふれあいの会がそれを引き受け、管理費を活動費に充てさせていただくことになりました。ご近所の方々、町内会の方々、参加者の皆さまのご協力を得て、二つの公園の管理をしてきました。私は皆様に感謝をしつつ、公園の見回り、日報の記入と土木センターへの届け、外トイレ（むくどり公園のような街区公園にはトイレの設置はなされないで、私の駐車場を外トイレにしたもの）の毎日のカギの開閉、公園で起きるさまざまな事柄（子どもたちの喧嘩、公園内の落書き、藤棚下のテーブルの焼け焦げ等々）への対応もありました。

むくどりホーム内は最初の大改造の後も、随時改修工事を行って、参加者がどうか気持ちよく安全に過ごせるようにと配慮し続けてきました。3年余は我々家族が住みながらの自宅開放でしたが、その後我々が引っ越しして、建物全部をむくどりホームの活動の場とした後は、冬の活動日のストーブの点火は一仕事でした。ある日、自分がひどい風邪を引いていて点火のためむくどりホームに行くのに自家用車に乗ろうとした時に、氷上で転倒し、右肩鍵盤断裂し、長い年月痛みと不自由を強いられました。

いろいろなことがありながらも、大勢の方々のあたたかいご協力により、人と人との出会いの喜びをたくさん経験させていただき、ここまで活動が続けることができました。

特にこの1年余、私は夫の看病も伴い、十分な活動参加ができない状況の時もあり、今後も続く可能性がありますので、今後の私のむくどりホーム・ふれあいの会との関わり方についても、一考する良いチャンスが与えられました。

「今日の参加者が今日のスタッフ」という完全ボランティア活動時代の約16年間を経て、5年半前から札幌市地域子育て支援拠点事業ひろば型の指定を受け、常勤のスタッフをお願いできるようになり、大きな力を得ています。常勤スタッフを中心にして、共に創り上げる活動として、多くのボランティアの方々の力がより一層必要であると痛感します。

もしも建物の改修工事の申請が受理されたなら、そこを経て次の出発につながるかと思いましたが、会長がそこまで責任を取ることはないとのことで、役員・スタッフは工事申請を今提出する時ではないという意見でした。しかし、やはり数年後に役員・スタッフの同意が得られれば、改修工事の申請を提出し、玄関スロープの整備、トランポリンの部屋の段差の解消、トイレを1つ増やす、調理台の整備などが行われるように願っています。これからまだまだやるべき課題とやりたいことは山積しています。

21年目の活動を歩み出した時に、上記のような事件による打撃を受け、むくどりホーム・ふれあいの会の信用が失われたのですが、これを大切なばねとして、スタッフ、役員、参加者一同が心を合わせ、心を引き締め、喜びながら、楽しみながら、よりよいむくどりホーム・ふれあいの会を築きあげていくことができるようにと、願っています。

むくどりホーム・ふれあいの会 会長及びむくどりホームの家主 柴川明子

【むくどりホーム・ふれあいの会概要】

1. 発足の目的

赤ちゃんからお年寄りまで障がいのある人もない人も、共に集い、違いを認め合いつつ交流しましょう。

2. 開催日時

月曜日、火曜日、土曜日 10 時から 16 時まで

3. 場所

立地場所は札幌市南区藤野なのですが、札幌駅から定山溪バスで、1 時間近くかかります。札幌駅から地下鉄南北線に乗りますと、南の終点真駒内で降り、そこからバスに乗ることもできます。真駒内と定山溪温泉の中間地点に藤野があります。国道から中道に入った閑静な住宅街で、むくどり公園は道路をぐるっと挟んで、10 軒の一般住宅と、むくどりホームに取り囲まれています。むくどりホーム・ふれあいの会の活動場所としては 2 階建て丸ごと一軒と 10 台分の駐車場を個人が提供しています。

4. 役員、スタッフなど

会長 1 名、副会長 1 名、常勤スタッフ 3 名、会計 1 名、会計監査 2 名、顧問 1 名、広報スタッフ 2 名、点検スタッフ 1 名 その他、ボランティアとして関わって下さる方々。

5. 活動内容

友だち作り、まずは受け入れる、仲間になる、昼食時やおやつタイムの自己紹介、テーマを決めて話す、音楽、歌う、楽器演奏、絵本読み、紙芝居、お絵かき、手芸、アロマでリラックス、話そう聞こう会、花壇の会、掃除、体操、おやつ作り、子どもの成長を喜び合う、子どもの喧嘩を見守る、コーヒー豆をひく、むくどりホームだより作成、私の子どもはチャレンジド（障がい理解の会）、自由遊びなど。

6. 活動を進める上での配慮

各々が居場所を得ているか。独りぼっちの人はいないか。疎外されている人はいないか。

7. 参加者

妊婦さん、赤ちゃん、幼児、親、小学生、中学生、高校生、大学生、専門学校生、大学院生、社会人、青年、壮年、高齢者、誰でも、年齢・障がいの有無に関係なく来ることができます。予約や登録なし、参加費無料の自由参加であり、その日誰が来るのか予測がつきません。

8. 設置されている設備及び遊具

ベビーベッド、トランポリン、ボールプール、ピアノ、からくり時計、ミュージックテーブル、キーボード、太鼓、鉄琴、マラカス、鈴、タンバリン、トーンチャイム、ままごとコーナー、ままごと道具、指人形、ブロック、円柱さし、プラレール、自動車のおもちゃ、輪投げ、カプラ、三輪車、竹馬、シャボン玉、絵本、布の絵本、冷蔵庫、電子レンジ、オーブン他。

謝 辞

今回この「むくどりホーム・ふれあいの会の生い立ちといま」を執筆するにあたり、改めてこの活動と向き合い、考察する機会が与えられました。今までこの活動に関わって下さったお一人お一人のことが思い出され、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

そして、原稿に関しては、拙い文を忍耐強くコメントして下さいました川田学先生に心より感謝申し上げます。また、何度もむくどりホームに足を運んで下さったこと、学生さんの多大な協力もあったことに深く御礼申し上げます。

付 記

本稿作成にあたり、KAKENHI (15 H 03105) の助成を受けた。